

OMM JAPAN 2022 セーフティレポート

安全管理チームマネージャ：村越真

はじめに

挑戦的なアウトドアスポーツでは、その魅力は常にリスクであると同時にリスクは魅力の素です。OMMも例外ではありません。地図とコンパスで自らの進路を決めるナビゲーションは OMM の大きな魅力ですが、それは同時に道迷いのリスクをはらんでいます。トレイル外を走る可能性、二日分の荷物を全て背負って行動すること、OMM の魅力の要素はいずれもリスク源でもあるのです。安全管理チームの役割は、こうしたリスクによって取り返しのつかない事態になることを防ぐことです。

安全管理は事故発生時の救助活動に焦点が当たりがちですが、OMM においては、それは多くのフェーズから成り立っています。参加者募集段階であるフェーズ 0 では、イベントのリスクについて参加者とコミュニケーションを取ること、イベント準備の段階であるフェーズ 1 では、リスクの把握と事前対応を行っています。また、事故発生場面であるフェーズ 3 は安全管理チームの中核的な仕事です。

以下では、上記のフェーズに沿ってレポートします。

1. フェーズ 0

参加を検討する人に対して、リスクを含めた競技の特性を適切に伝えることが、この段階の重要な目的です。トレイルを外れナビゲーションを行い、1泊2日の装備を全て背負って自己完結的にレースをする必要がある OMM では、その特性を理解し、準備せずに参加すると、多くのリスクが生まれます。昨年度から事前セミナーを開催していますが、読図を中心に多くの参加をいただきました。机上・オンラインではありますが、スキルアップだけでなく新たな楽しみの発見に役立ったことと思います。また今年はルールや装備についての概説的なセミナーを動画で公開(無料)しました。イベントディレクターのレポートにもあるように、1000を越える視聴がありました。皆さんのリスクマネジメントに一定の貢献があったと考えています。

2. フェーズ 1

事前のリスク管理では、初期のコース案に沿って現地を把握し、安全上の課題の洗い出しと評価を行います。OMM ではリスクを全て排除することを意図していません。過度にリスクを排除しようとするれば、魅力も失われます。安全管理のポリシーは、参加者が通常のスキルと状況であれば対応可能なリスクは参加者の挑戦課題として残し、そうでないリスクを事前に排除するという方針です。こうして把握したリスク情報をプログラムや最終情報の形で参加者に提供しています。

リスク管理では、常に万が一を想定せよと言われます。OMM でも、あつてはならない事故(死亡や後遺症が残る重篤な事故)は発生させないこと、それに至らない大きな事故(骨折や縫合を必要とするけが)は極力排除することを目標としています。一方で、それは大きな事故が起こる可能性を残すこととなります。事故の際に十分な対応ができるよう、搬送スキルを持ったスタッフと国土舘大学の救護チーム、必要な資源を準備しています。

3. フェーズ3：トラブル後の対応

OMM2022では、二日間合わせて8件のけが・体調不良に対応しました。この他に数件のSI紛失、道迷い、装備紛失への対応がありました。このうち治療が必要な切り傷が2件、骨折が2件(1件は縫合も含む)です。いずれも当事者の冷静な対応、国士舘大学の救護チームの適切な対応および、速やかな病院受診によりダメージの拡大を防ぐことができました。

一方で、足下の植物による転倒による外傷のケースでは少し負傷部位がずれていたら、予後に大きな影響があったと思われる事例もありました。今年は幸いにも枝はね等による目のけがはありませんでした。トレイルを外れて走る際のリスクとそれを踏まえた慎重な行動を改めてお願いします。

4. フェーズ2：レース中の対応

これまでの説明の中で「フェーズ2」が抜けていると気づかれたのではないのでしょうか。リスクがある以上、時には事故が発生し、参加者がトラブルに陥る場面が発生します。OMMでは、競技特性上、主催者は参加者を100%見守ることはできません。トラブルに対応する力が選手本人、バディーの選手、あるいは偶々近くにいた選手に求められます。つまり、OMMの安全管理は、参加者との協働があって初めて成り立つのです。それがフェーズ2です。

参加者がレース中どのように自らのリスクマネジメントを行ったかは私たちもよく分かりません。救護所が対応したけが・トラブルの数が8件であることを考えれば、多くの参加者はトラブルに適切に対応したのだと思います。昨年はチームの分離について強いお願いをしました。今年は大きな分離は主催者としては確認されていません。また例年少くない数発生している落とし物とそれによる失格もほとんどありませんでした。安全を確保するためにルールを守るという考えが参加者の中に浸透してきた証だと考えています。

安全管理チームも、レース後半になると未帰還者を確認するとともにその推移を見守っています。特に二日目において、制限時間を越えても帰還しないことは何らかのトラブルの可能性が高まりますので、積極的に連絡を取ります。これは本国であるUKとは異なる対応です。初日の20:00にキャンプ場に到着しないチームについても同様です。OMMの精神を維持しながらも、日本の文化状況への適応を図っているのです。

5. ルール・装備についての再度の確認を

主催者が直接確認できませんでしたが、いくつかのルールからの逸脱事項があったという報告が参加者からありました。

①チームの分離と荷物のデポ：もしもの際にあなたの命を守ってくれるのはあなたの装備とバディーであり、それによりOMMは過酷なレースが可能なのだ、というルールの根幹を今一度ご確認ください。

②緊急時の電話番号に緊急ではない連絡がありました。SIの紛失への対応、道迷いへの助力要請です。UKでは電話携帯のルールがそもそもありません。日本でも緊急時以外の連絡はルールで禁止されています。一旦レースがスタートしたら、最後まで自分たちの「山の常識 (sound mountain judgment)」に従い判断することがOMMの基本ルールです。今後も自立した参加者としての行動をお願いします。

③どのエリアのどの時間帯か分かりませんが、キャンプ場で騒がしかったという事後の訴えがありました。クワイエットエリアや21時以降はもちろんのこと、それ以外の場面・場合でも周囲への配慮をお願いします。

④制限時間後には速やかな帰還を：制限時間は、全てのチームに平等な競技上の機会を与えると同時に安全を確保するためにもあります。安全管理チームは制限時間を過ぎたチームの動静には注意を払い続けていま

す。特にフィニッシュ閉鎖後には速やかに安全確認の連絡を取るようになっています。制限時間後の積極的なコンタクトを今後もお願いします。

6. 安全管理上の総括

OMM で定められているルールは、自然の中では特殊なものではありません。まさに「山での適切な判断」を条文化したものにすぎません。装備やルール遵守によって、チャレンジはコントロール可能なものになります。その点を再度強調して安全管理レポートの結びとします。

謝辞

なお、最後になりましたが、安全管理チームとして森の中で参加者を見守っていただいた国際ガイド長岡健一チーム（上田暁崇さん、多部田弘和さん）、長野県山岳連盟の大西浩チームの皆さん（松田大さん、杉山昭久さん、赤梅琴美さん）、上野匡さん、久保田篤さん、サブチーフの早川秀人さん、骨折も含めたけがに的確に対応していただいた国土舘大学救護チームの皆さん、どうもありがとうございました。

安全管理マネージャー
村越 真